

経験したことのない壮絶な状況 人とのつながりが救助・搜索活動に生きる

胆振東部消防組合消防署厚真支署警防1係長 田中淳一さん
厚真消防団第1分団班長（宇降地区・農業） 高橋清吾さん
第1分団班長（東和地区・農業） 尾谷 彰さん
団員（富里地区・農業） 石井幸秀さん

——地震発生時の状況を教えてください。

田中 発災当時、厚真支署には26人の団員が所属し、5人で夜勤に当たっていました。仮眠室で眠っていた時に地震が発生し、大の大人が悲鳴を上げたんです。揺れが収まったあと、同僚に非常用の発電機を回すよう指示しました。ぱっと明かりが点くと、辺りはめちゃくちゃ。ロッカーは倒れ、あらゆる物がフロアに散らばっていました。非常召集のサイレンを鳴らそうとしましたが、電気系のトラブルで使用不能でした。



田中 淳一さん

が収まってから家族全員をリビングに集めました。それから何をすればよいかかわらず、放心状態。現実的であって現実でないような感覚でした。



高橋 清吾さん

高橋 とんでもない揺れで、とっさに隣で寝ていた妻と娘に覆いかぶさってかばいました。あらゆる物が倒れてぐちゃぐちゃ。ビニールハウスが気になり外に出ると、タンクが倒れて軽油が流出していました。リフトでタンクを起こしている時に消防のサイレンを聞いたんです。

田中 署のサイレンが鳴らせなかったので、消防車両のサイレンを一齐に鳴らしたんです。



尾谷 彰さん

高橋 私はそれを聞いたんですね。

——その後、初動としてどのようなことをしましたか？

田中 職員に怪我がないか、サイレンは鳴るのか、出動できるか、車庫のシャッターは開くのかなど、もろもろの確認をしました。団員さんも震度4以上で自動召集されることになっていたので、来てもらえるだろうと考えていました。最初の確認が終わった後、午前3時25分頃に街中の被害を確認し

ようとして職員1隊2名を出しました。そして午前3時40分頃に最初の通報が入ります。吉野地区が大変なことになっていると。

救助隊1隊を編成して出動させたのですが、朝日地区から先に行けない。富里地区から回り込むように指示を出しましたが、このルートも道がふさがっている。どうやっても吉野地区に入れない。どうしようもないので、行ける所から活動を始めることにしました。朝日地区の家が土砂に流されたという通報がありましたから、その搜索に変更しました。そうこうしているうちに、美里地区でも生き埋めが発生した、声が出る、と連絡があったので、団員さんに確認に行ってもらいました。この間に木炭窯がつぶれて火災が発生し、職員と団員で消火隊を編成して対応に当たっています。発災から9月10日まで全団員90名が搜索活動や安否確認に当たりました。

——消防団の皆さんはすぐに支署に駆けつけたのですか？

尾谷 まず、地元の自警団として地区の安否確認を行いました。近所の方から「知り合いのばあちゃんが一人暮らしをしている

ので、見に行つてほしい」と頼まれたんです。生き埋めになっていいるとの話だったので地元の皆さんですぐ救助に向かいました。そのばあちゃんの家は裏山の土砂で流され、ばあちゃんは奇跡的に残った屋根とベッドの間に挟まれていました。近所の人たちが声をかけると、「助けてくれ」という声がかすかに聞こえてきたんです。近所の人にジャッキを持ってきてもらい、屋根を持ち上げました。ばあちゃんの息子さんも消防団員だったので、一緒に屋根の下にもぐり込み、1時間半ほどかけて何とか助け出したんです。この地域には一人暮らしの人が多く、そのばあちゃんを息子さんに任せ、私は見回りに出ました。見回りのあとに署に向かったもので、着いたのは午前8時くらいだったと思います。

石井 非常召集がかかったので、いつもの東和地区の道から署に向かったんですが、土砂崩れで道がふさがって通れない。迂回しようとして吉野地区に向かいましたが、土砂崩れで、ここも通れない。付近を警戒していた富里地区の自警団の人たちに声をかけると、川沿いの農道なら通れるかもしれない、と言います。軽トラがようやく通れる

ほどの砂利道から署へ向かいました。

高橋 道路がめくれたり、橋に段差が出来たり、本当に行けるのか？と思いましたが何とか進み、早い時間に署に着いています。副団長と共に現場へ行ってくれと指示され、消防の車で向かいました。その家はすでに崩れていました。2階で寝ていた方は助かりましたが、ほかの家族は崩れた家の下敷きに。何度も大声で呼びかけましたが、返答がない。重機や機材もありませんから、どうすることもできない。苦渋の決断で、現状を確認して署に戻りました。そうしているうちに富里地区から石井君が来たんです。

——支署に到着してからのような活動をされましたか？

高橋 土砂崩れで北部には車で行けないと思っていた時に石井君が来たので、「おまえ、どうやって来たんだよ」と聞きました。通れる道があるのならば、富里地区の奥にある高丘地区や幌内地区に行けることになりました。私の叔父が高丘地区に住んでいて心配だったこともあり、調査隊が編成された時、真っ先に手を挙げました。

叔父の家の50メートル手前のカーブが土砂崩れで、先に進めませんでした。リーダの部長さんに「この先に叔父さんの家があるから、行ってもいいですか?」と言うと「よし、いくべ!」

土砂を越えると、あるはずの家がない。血の気が引きました。半分泣きながら駆け下りたんですが、叔父さんと息子さんの返事がない。ところが、叔母さんは2階で寝ていたようで無事だったんです。頭に怪我をしていたので、そのまま町内の病院に連れて行きました。

石井君がああ農道を使って来てくれなかったら、その道を通れるという情報が1時間でも遅れたら、部長さんが「いくべ」と言ってくれなかったら、叔母さんは生きていなかったかもしれないと感じました。

石井 私富里地区に住んでいるので、富里地区と幌内地区の様子を見に行くことになりました。富里地区では地元の人々が土砂崩れの現場に集まっていたので、誰が行方不明だとか地域の状況を聞き取って、幌内地区に向かいました。ここでも幌内マナビイハウス(公民館)に地元の方々が集まっていたので、状況を聞き取り、無線を

使って署の指揮本部に連絡しました。

署に戻ると、吉野地区に行くように指示されました。そこも土砂崩れで家が数十メートル先の田んぼまで流されているんです。土砂の中から屋根が出ていたので、見える範囲で鉄板を剥がしてみたんですが、下手な所を触って崩れても危険ですから、結局何もできない状態でした。

田中 午前4時台のまだ暗い時間帯でしたが、署に私一人になる時間帯もありました。「家が崩れて流れそうだ」という通報が入ったんですが、「人員も車両も出払っており、今は行けません」としか言えませんでした。25年間消防に勤めていますが、出動できないのは初めてです。強い無力感を覚えましたね。

——当日の午後からはどのような活動になりましたか?

田中 当日の昼までに自衛隊、警察、消防の広域応援隊が到着していたので、幌内地区の捜索を分担して行うことになりました。土砂崩れで地形が変わってしまったので、自衛隊・消防庁の航空写真やグーグルマップのストリートビューで地震前後を比

較し、家の位置を推定して作業に入りました。

尾谷 初日は手掘りです。道が崩れていまずから、重機が現場にたどり着けません。石井君の発見したルートが唯一ですから、そこも車両が通るたびに状態が悪くなっていきました。

高橋 家や道路が完全に土砂に埋まってしまい、どこに何があるのかわからない。「屋根があるからこの辺りだろう」と思っただけでも見当違いだったり、泥だらけの木を切ってチェーンソーがすぐに切れなくなったりしましたが、早く見つけてあげたい——その思いだけでした。

また、報道機関の車両が捜索現場に長蛇の列をつくっていたので、到着まで時間がかかり、大変困りました。

田中 本来であれば消防団員さんだけで現場に向かってもらうようなことはしませんが、緊急事態ではそうは言っていられませんが、ふだんからの信頼をお願いしました。

尾谷 消防団として役割以上のものを求められた意識はなく、消防団に入った以上、やるべきことをやらなくてはならないという思いです。消防団だからこれ以上やって

はいけないという意識は一切ありませんでした。

高橋 僕ら消防団員は団長の訓示で「我々の使命は町民の命を守ることだ」と聞いていましたが、まさに、これがそうなんだと、あとから実感しました。

——この地震を経験して、今思われていることを聞かせてください。

尾谷 地震を経験して、ふだんからの防災意識は高まりました。そして、人と人のつながりの大切さを実感しています。

高橋 ふだんからの備え、そしてふだんからの隣近所の付き合い合いの大切さ。あのようになってしまったら、自分一人ではどうしようもできないですから。

石井 今回は団体として救助する側でしたが、今後、身近の誰に助けってもらうことになるかわからない。そう思うと、つねに周りの人のことを考えて大切にしていきたいと感じました。



重機で捜索する緊迫した現場(札幌市消防局提供)



被災現場で活動する職員・団員(胆振東部消防組合提供)